（1） 精神障害へのスティグマ解消をめざして～精神保健教育の実践報告～

医療福祉学部医療福祉学科　　○田淵　泰子

【目的】

中学生が抱く精神障害への認識の実態を明らかにすることと精神保健教育の介入が，精神障害への認識を変容させることができるかを明らかにすることである。

【方法】

2016年にX中学校において，精神疾患の知識習得後，精神障害当事者と交流を行う合計6時間の精神保健教育「こころの病気を学ぶ授業」を実施した。授業前後に中学2年生296人（実施前），295人（実施後），実施後に教員10人に自記式質問紙調査を行っており，これらの資料を既存資料として見直しを行った。本研究は，岡山大学大学院教育学研究科倫理委員会（課題番号14番）の承認を得て実施した。

【結果】

実施前，精神障害のイメージは「誰でもなり得る」「普通ではない」「暗い」と続き，割合は，各々20%以上であった。「怖い」「暴力的」「犯罪を起こす」の選択肢は16%から18%に認められた。契機は,「漠然としている」や「マスメディア」が多く，自らの体験は,僅か5%である。実施後は,「誰でもなり得る」「理解できる」「意思疎通可能」等の肯定的選択肢が増加した。もし，身近にいたら「当事者の力になりたい」との回答が顕著に増加した。当事者との交流授業が,精神障害者に対する社会的距離を縮小し，援助行動の心構えを促進し，当事者に対する意識変容に好ましい結果を齎すことが明らかになった。

【考察】

精神保健教育の意義として，精神疾患を自分事として捉えられ，早期援助希求行動に繋がる。自我形成や自分らしさのアイデンティティ確立に有益である。人間の多様性を尊重するインクルーシブ教育の機会となり，地域精神保健の普及啓発活動へ繋がると考える。

【まとめ】

本研究の成果は，今後の精神保健教育の構築に役立てることができる。教育科学の視点からも，インクルーシブ社会構築に繋がっていく可能性という観点から，意義があると考える。